# 母の悲しみの中に他者の痛みを視る人

## 豊福みどり第二詩集『ただいま』に寄せて

人には必ずあることがきっかけで母を思い出す瞬間がある。自分を産んでくれた母の悲しみに、ずっと後になって気づいたことに起因するのかも知れない。生きるのが精一杯で感謝を忘れていたのを取り戻させてくれる瞬間でもある。自分の原点を忘れた時に人は人間として何か大切なものを見失っているのではないか。自分が大人になる上でどれだけ愛情や労力が自分に注がれたか、その自分を育ててくれた多くの者たちを忘れていた傲慢さに、母の存在は気づかせてくれる。きっと母の悲しみは、自己の心の奥底に存在の悲しみや痛みとなって住みついているからだろう。

豊福みどりさんの第一詩集『日が落ちる時刻』のタイトルにもなった詩は、九州の久留米市に一人で暮らす母を、遠い関東の地で沈む夕日を見ると想起するという詩だ。私が豊福さんの紹介をするよりも、この一篇の詩を読めば豊福さんがどんな生まれ育ちをして、中心テーマに何を選んできたかが自然に汲み取れるだろう。また豊福さんの持ち味である詩行の自然なリズム感も読みとれるだろう。

日が落ちる時刻

私の生まれた家は
昔とちっとも変わらずに
古い石垣の上にある
不揃いの石の上に建つ
その家で
母は一人で暮らしている
四人の娘を産んだので
四度のつらい別れをし
今は一人で暮らしている
こわれた屋根の修理をし
痛んだ腰の治療をし
小さな歩幅になって歩いている

初夏の頃
風通しの良いその家で
一人そうめんを茹でながら
鼻歌などを歌っている
友達が訪ねて来ると
くったくのない顔で
笑いころげているけれど
日が落ちる時刻には

きっと
部屋の隅の大きな孤独と
向かい合っていることだろう

遠い地に住む私は
沈む夕日を見ると
そう視えてくる

遠く離れた地で夕日を見ながら母の「大きな孤独」を「視ている」娘でしかありえないことを豊福さんは淡々と記している。しかしこのような詩が書けることは、深い母の悲しみを受け止めて、削ぎ落とされた詩行に転化する想像力が必要なのだ。その意味で豊福さんはこの詩によって、学生の頃から詩を書き始めてきた自己の中心テーマを発見した手応えを感じたように思われる。豊福さんは多様な存在の本質を「視ること」の方法で試行錯誤の果てに発見してきたのだろう。その根源に母の存在があることを第一詩集で明らかにしたのだった。一日の中でも、朝日の昇る時間と夕日の落ちる時間は、素直にその光景を眺めるなら最も美しい時刻だ。朝日が希望であるなら、夕日は祈りであるだろう。一日の多忙な時間を過ぎて、沈む夕日を眺めて母への感謝と母の幸せを祈る娘の姿はとても眩しく感じる。遠く離れていても母子は同じ夕日を視ているのだという共通感覚を信じているからだろう。

豊福さんの心情が読み手の心情を素直にさせて、夕日の透明な赤い光で洗われてくるような心持ちがしてくる。豊福さんの詩はその意味で人の心を素直にさせるくれる力がある。私はこのような詩こそが、詩の本来の力であり、詩が詩を読まない人々にも読まれる可能性を広げると考えている。主婦である豊福さんは子育てが落ちついた後に、十数年も地元の詩のサークルでこつこつと詩を書き続けてきた。限界を感じていた頃にその仲間から紹介されて、山本十四尾さんが古河周辺で開いていた詩の教室に通うようになり研鑽を重ねてきた。その成果がこの第一詩集だった。豊福さんの詩は、他者不在で独りよがりの暗喩偏重の難解さとは無縁だ。伝えたいことを端的な言葉で手触りのある言葉とイメージでしっかりと構築している。一篇の詩はリズミカルで展開が分かりやすく、一冊の絵本のようにも受け取れる。しかし一見分かりやすいが、その投げ掛けているものは、生きることの根本的な姿勢を読む側に突き付けていて、やはり深い問いを秘めた詩としてじっくり語りかけてくるのだ。例えば「習性」という詩を読んでみる。

習　性

電車がゴトンと動き出すと
身体がひょいと後ろへ引き戻される

電車が駅に着いて発車するたびに
瞬間
後ろへ引っ張られる身体
不意打ちを食らったような動きは
前だけをみている意識を
うろたえさせる
日めくりを慌ただしく剝がしていくような
追われた時間の中で
前へ進むことが　目的になってしまった
一秒でも早くと足早に階段を駆け上がり
電車に乗り込むのは　何のため
誰よりも早く目的地に着きたいと思うのは
何のため

電車が発車する時のうろたえは
そんな現代の習性を
みんなまとめて
ひょいと後ろへ引き戻す

「習性」という詩は、豊福さんの時間感覚を知る上で重要な作品だ。「身体がひょいと後ろへ引き戻される」という感覚は、誰でも日常的に体験することだが、そこから私たちが習性として取り巻かれている時間が直線的で物理的な時間であることを豊福さんはあばいてみせるのだ。そして本来的な時間とは何であるのかを問いかけるくる。「誰よりも早く目的地に着きたいと思うのは／何のため」という問いかけは、少しも気負うことなく、本来的で重層的な質的時間を取り戻そうとする試みなのだ。「電車が発車する時のうろたえ」に秘められていることに豊福さんがこだわることは、いかに豊福さんがいつも本来的なことを視ようとしているかに他ならない。夕日を見ながら大切な人を想うように、同じ電車に乗った乗客たちの個々の時間を取り戻すきっかけを豊福さんは考えているのだと思われる。誰もが分かるように平易な言葉と自然な展開で、過去・現在・未来を含む根源的な時間を開示させて、さりげなく私たちに提示しているのだ。

第一詩集の中で私が好きな詩に「少女」がある。私たちが子供時代に感じていたこの世に現れたきた不思議さを感じさせてくれる詩だ。

少　女

滑り台の上で
少女が空を見上げている
滑り台の
登りつめた所は
意外に高かったので

少女は
登った高さを確かめると
ひとつ
頷いたような仕草をして
また　空を見上げた

澄み渡った空に
真綿をちぎって丸めたような雲が
幾重にも連なり
ちょうど良い歩幅の階段のように
少女の頭上に整っていた

滑り降りる筈の
滑り台の上で
少女は何を思ったか
ふくらんだ頬を空に向けて
歩き出そうとしている
少女の思いよりも
はるかに
はるかに
空は高いというのに

この「少女」という詩は、大人が考えている滑り台という機能を超えた子供の自然な感覚を見事に表現している。滑り台の上で空の美しさを発見する子供の行動の方が、その子供にとってはとても大切なことだ。そのことが分かって子供を見詰める愛情こそが本来的であるだろう。忙しく滑り台を滑る子供だけでなく、空を見詰める子供に豊福さんは、誰よりも詩を感じているのだろう。滑り台の上から空を見上げる時間こそが、その子供のその後の人生にとって根源的な時間になるようにとの祈りの言葉であるのかも知れない。その少女はたまたま見かけた他者である少女であったかも知れないし、自分の子どもであったかも知れない。と同時にその少女は豊福さんの自画像であったかも知れないし、詩を書き続けてきた詩的精神の化身かも知れないと、想像力をふくらませながら読み取ることもできるのだ。

豊福さんは第一詩集のあとがきで生涯一冊の詩集を出すことが夢だったと語っていた。純粋に詩を書き続けて詩集をまとめるとは、きっとその豊福さんの願いこそが本来的だろう。第一詩集を出した後に多くの反響があったそうだ。ひっそりと詩を書いてきた豊福さんにとって、自分の詩に多くの詩人たちが真摯に向き合ってくれたことは、驚きであり想像を超えたことだったらしい。その後も豊福さんは山本十四尾さんが主宰する詩誌「衣」で作品を書き続けてきた。その詩作品も多くの人が読んでくれている手応えを感じている。私は豊福さんが決して他者の意見に惑わされる詩人ではないことが

分かる。例えば山本さんの詩の教室で何度か挨拶をしたり、「コールサック」誌を手渡したこともあるが、自分から話し出すことはない。他者の意見や感受性を遠くから「視ている」。そしてそのことが自分にとって何であるかをじっくり考えているタイプであると思われた。山本さんの詩の教室は七十回開かれた。そこで多くの講師の詩人たちがどのように「空を見上げている」かを「視ていた」のだと思われる。

夢の続きになった第二詩集『ただいま』からタイトルの詩「ただいま」を引用してみる。

ただいま

私は時々　空を飛ぶ
遠い親鳥に会いに行くため

親鳥は
羽の繕いをしながらも
とんと　羽ばたくことはなくなった
いつも
私を産んだ場所で
首を長くして待っている

「ただいま」と言って
巣に戻る私を
三本足の
心もとない足取りで
迎えてくれる

いつまでも
親鳥が
私を産んだことを
忘れないように
再会した時は
二羽でじっと　にらめっこをする

豊福さんの詩集には鳥が出てくる詩が多い。その中でもこの「ただいま」は、前詩集『日の落ちる時刻』の母を思う気持ちをさらに展開させていく。「私を産んだ場所で／首を長くして待っている」母に「ただいま」と言って帰るときの瞬間を反復する詩だ。「ただいま」と言える場所を持つことの幸せを記しながら、互いが変わっていないか、にらめっこする場面はユーモアが滲み出ている。豊福さんにとってこの詩は、良き思い出をたくさん残してくれた母を永遠に記憶させた詩であるのかも知れない。この世にいなくなっても帰郷し「ただいま」と言えるのは、母の場所でしかないことを予知している。帰る場所を永遠に残してくれた存在に対して溢れるような想いが、この詩の「ただいま」という言葉に宿っている。豊福さんは帰郷する時の感動を絶えず反復し書き続ける詩人なのだ。この詩を書き終えてしばらくして母上は亡くなったと聞いている。

最後に新詩集で私が最も気に入っている詩「赤いカンナの咲く道で」を引用したい。おだやかでひかえめな豊福さんだが、実は生きるものへの尊厳を損ねたり、理不尽なことに対して激しい怒りを感ずる正義感を胸に秘めている。そんなことを感じさせてくれながら、色彩豊かで絵本のような豊福さんのイメージ力が発揮された詩だ。「アマガエル」という他者の痛みを受け止める「赤いカンナ」の存在は、私たちの心に生きている者たちへの共感を呼び起こす。それは豊福さんが母の悲しみの中に他者の痛みを視てしまう詩人だからであろう。「青空を抱きかかえようと」する人びとや、詩を読まない人びとにも、絵本を手に取るようにこの詩集をこっそり読ませたいと願っている。

赤いカンナの咲く道で

アマガエルが
アスファルトの道で
一瞬にして平面になった
傍らで　赤いカンナが
肝を潰した

たまにしか車の通らない農道の
稲穂が少し色づいて
遠くで油蟬が鳴いていた

雨上がりの
青空を抱きかかえようと
飛び出した　その一瞬
たまたま通りかかった軽トラックの
前の車輪が真犯人
赤いカンナが目撃者

あっという間の出来事で
別れの言葉も残さずに
アマガエルは
アスファルトの上に貼りついた
赤いカンナは怒りで燃えた
あれからずっと　アマガエルは
道の真ん中で
青い空を見上げたまま